

東京・杉並区立和泉中

東京都杉並区立和泉中学校(由井良昌校長、生徒114人)は8月以降、社会貢献プログラム

自ら地域の課題見つけ募金活動

米国生まれ 社会貢献プログラムに挑戦

寄付先も話し合いで決定

「東日本大震災で被災した生徒たちに文房具や参考書、ドリルなどを送るための募金を集めています。募金は被災地で学習支援をしているNPO団体アスイクに寄付します」。9月22日、同校の有志9人が3人ずつ3班に分かれて、京王線永福町駅前の商店街、北口商和会の店舗を「軒一軒回りながら、募金をどう使うか、どこにそれを寄付するかを説明して協力を得ていく。

「ペニーハーベストプログラム」そのものは、アメリカのNPOコミュニティが開発した市民教育プログラム。1年間のカリキュラムに沿い、子ども自身が地域の課題を見つけ、その課題解決のために必要な資金を募金で集め、課題を解決するためにNPOなどを探し、寄付先、額なども話し合い、決定していく。

「ペニーハーベストプログラム」そのものは、アメリカのNPOコミュニティが開発した市民教育プログラム。1年間のカリキュラムに沿い、子ども自身が地域の課題を見つけ、その課題解決のために必要な資金を募金で集め、課題を解決するためにNPOなどを探し、寄付先、額なども話し合い、決定していく。

ムに取り組んできた。青少年募金プログラムとしてアメリカで20年の実績がある「ペニーハーベストプログラム」と呼ばれるもの。同校はそのパイロット校として、短期間の取り組みながら、わが国で初めてチャレンジした。

今回のプログラム導入に当たって、キャリア教育の一環として、全校で貢献活動する様子を知っている。

加により、全役職員が参加するボランティアデーなどを設ける日本サムスに企業訪問して、社会貢献活動する様子を知っている。

募金活動を進めるに当たっては、生徒同士の「頑張ってるね」など温かく迎えられ、協力を得られた。

被災生徒ら支援へ 商店街に協力依頼



店舗を訪れ、募金の協力を得るため、丁寧に説明する生徒たち

「ペニーハーベストプログラム」そのものは、アメリカのNPOコミュニティが開発した市民教育プログラム。1年間のカリキュラムに沿い、子ども自身が地域の課題を見つけ、その課題解決のために必要な資金を募金で集め、課題を解決するためにNPOなどを探し、寄付先、額なども話し合い、決定していく。

「ペニーハーベストプログラム」そのものは、アメリカのNPOコミュニティが開発した市民教育プログラム。1年間のカリキュラムに沿い、子ども自身が地域の課題を見つけ、その課題解決のために必要な資金を募金で集め、課題を解決するためにNPOなどを探し、寄付先、額なども話し合い、決定していく。

中学校

和泉中 03-333-227671
日本フイルンソロー 03-520057580

依頼状を生徒たちは手渡して歩いた。

募金活動の日は、ディスカッションの時にも協力してくれた学生団体SUNSHINEのメンバーが、各班に1人ずつ付き、商店街での募金活動、駅前での街頭募金活動を支えた。

商店街では、多忙な業務や商店街での募金活動をしていることなどを理由に協力してもらえないこともあったが、生徒たちが募金の目的、使い道などを説明すると、ほとんどの店舗では「依頼状の文章が良かったよ」「頑張ってるね」など温かく迎えられ、協力を得られた。

参加した女子生徒は「今までの募金活動も楽しかったが、今回の活動は全て自分で決めるので達成感があった」と終了後、話した。由井校長は「募金活動だけでなく、NPOや企業などの活動を通じて、社会貢献活動が身近に感じられたようだ」と評価した。

めた募金は、13万円を超え、13万を超えたい。活動は募金だけが目的ではなく、「社会の一員として、子どもが自分の力や大人を信じ、先となるアスイクとの交流なども検討している。

めた募金は、13万円を超え、13万を超えたい。活動は募金だけが目的ではなく、「社会の一員として、子どもが自分の力や大人を信じ、先となるアスイクとの交流なども検討している。

めた募金は、13万円を超え、13万を超えたい。活動は募金だけが目的ではなく、「社会の一員として、子どもが自分の力や大人を信じ、先となるアスイクとの交流なども検討している。

めた募金は、13万円を超え、13万を超えたい。活動は募金だけが目的ではなく、「社会の一員として、子どもが自分の力や大人を信じ、先となるアスイクとの交流なども検討している。

めた募金は、13万円を超え、13万を超えたい。活動は募金だけが目的ではなく、「社会の一員として、子どもが自分の力や大人を信じ、先となるアスイクとの交流なども検討している。